

第三者意見

特定非営利活動法人
循環型社会研究会
代表 山口 民雄



循環型社会研究会

次世代に継承すべき自然生態系と調和した社会の在り方を地球的視点から考察し、地域における市民、事業者、行政の循環型社会形成に向けた取り組みの研究、支援、実践を行うことを目的とする市民団体。

URL:<http://www.nord-ise.com/junkan/>

CSRはしばしば「終わりのない旅」に喩えられます。これは、社会の要請が時代状況により変化し、企業がその要請に着実に応えることにCSRの本質が根ざしているためでしょう。そのため、企業では不断にCSRを推進する仕組みの構築やCSRの深耕が不可欠です。トプコンでは、とりわけ2007年のグローバル・コンパクトへの参加以降、積極的にこうした取り組みが行われています。

本報告書ではTOPCON WAYやコーポレート・ガバナンス原則、国内外公務員等贈賄防止規定、渉外監理基本規定、トプコングループ人財育成基本方針などを策定したことが報告されています。これらの策定に当たっては、社内での深い議論が不可欠ですが、CSR Committee委員長が総括で「プロセスこそがCSR経営を加速させる近道である」と述べられています。まさに当を得たご認識と理解しています。今後は、TOPCON WAY、CSR基本方針、コーポレート・ガバナンス原則、事業行動基準、環境ビジョン2020などの関係性を明確にするとともに、TOPCON VISION(ありたい姿)とロードマップを示されることにより、理解が促進され、グループの従業員の方々に浸透することと思います。

また、こうした仕組み構築とともに、今回初めてCSRの各項目で「自己評価」を実施されました。この自己評価については同総括で「評価の客観性・正当性を担保する意味では課題を残しています」と述べられています。私も同意見です。ただ、課題を残しつつも、自己評価をすることは、CSRのPDCAを確実に

に回す契機となり、報告書の記載も今後、PD中心の記載からPDCAの記載となり、CSR深耕の大きなトリガーになると確信しています。今後は、各項目のKPI(Key Performance Indicator)とともに定量的な目標を設定していただきたいと思います。

本報告書はTOPCON WAYの制定に伴い、この7つの柱に沿って構成されています。こうした構成を、私は「アプローチ型」(ありたい姿へのアプローチ)と称していますが、今後継続してこの型を踏襲することによってTOPCON WAYがどこまで具現化したかを検証することができると考えます。そのためにも、KPIの設定が不可欠と思います。

以上のように、本報告書は確実に「次の旅」に出発していることを示していますが、2011年版報告書では東日本大震災関係の報告やISO26000への対応にステークホルダーは注目しています。震災についてはトップメッセージに始まり、特集、BCP、復興支援などについて記載されています。これらの情報は不可欠ですが、震災に直面して顕在化した問題点、例えば、サプライチェーンや生産拠点配置、エネルギー施策、地域との関係性などに言及していただきたかったと思います。ただ、報告書の発行が5月ということで、十分な検証ができなかったと考えますので、次回の報告に期待しています。ISO26000については参加されているGCや参考にされているGRIとISOは協力覚書(MOU)を結んでいますので、本規格を参考に自社のCSRについて検証され、その検証結果を報告されることを強く期待しています。

第三者意見を受けて

進化・変化する社会の要請にどのように応えていくかについて真正面から向き合うことは、トプコングループという共同体を持続的に成長させる上で大切と考えています。

2011年CSR報告書は、その到達点を示すものですが、山口様の第三者意見は、社会の要請を代弁した提言であり、今後の取り組みの視点を明示いただいた、と理解しています。

取り組む課題の濃淡はありますが、いずれも真正面から向き合い、ステークホルダーの皆様とともに答えを出していく所存です。

CSR Committee
委員長 宮脇 裕 正